

## 山田昌久\*：日本における木材利用史 —人間・植物関係史の視点から

### Masahisa YAMADA : The history of Wood Industry in Japan — A Note to Human-Plant Relationships

**Abstract** Five stages of the wood industry in Japan excluding Hokkaido are summarized. 1. The discovery of what woods are available, 2. community resources between local groups, 3. the use of wood for fuel, construction and tools, 4. the introduction of coniferous wood for construction and tools, 5. the increase of wood consumption and the introduction of afforestation accompanied by economic growth. These are linked with Japanese history from the perspective of economic activities.

**Key Words:** Wood industry, Human-plant relationship, Wood remains, Economic activities

#### 1. はじめに

日本列島に展開した人類史のなかであって、人間・植物関係史は個性的展開を表現しており、文化類型の認識のために重要な研究対象となる。なぜならば、人間・植物関係史は地球上各地で展開し続けているが、その「交渉関係」は決して同じ「みちすじ」を持ってはいない。自然条件の違いと対応法の違いから、「交渉関係」はそれぞれの時間軸のなかで変容を見せるのである。そして、この問題を扱うには、従来の植物学・人類学・考古学・歴史学といった学問領域からの接近からでは解釈しきれない、視野の広がり・研究意識が要求される。当然、それにとまなう研究手法も必要となる。

人間・植物関係史はまた、実際のところ各部門が重複して成立している訳であるが、多岐にわたる部門ごとの関係史に細分して考えることもできる。今回の対象は、日本における人間・植物関係のなかの木材利用史であり、その時間を紀元前 6,000 年紀から紀元後 1,700 年紀、すなわち縄紋時代から江戸時代までに限る。

東アジアの人類史は、この時間軸にあつては、広領域に多角的な経済活動を運用する動向期として捉えることができる。居住施設や共居域を持って、一定の領域で経済活動を行なうこの動向期は、さらに細分され変移する。すなわち、①集団の帰属意識（民族）生成の動向、②王権や国家の発生・模倣・非模倣の動向、③生産手段の改良の動向、④経済活動組織化の動向といった変移である。そうした背景のなかで、各地域の人間・植物関係は随時変化し、なかには生活様式の違いに影響を及ぼしたと理解できるものもある。たとえば、食料資源利用部門では、生産技術について多くの研究が進められており、農耕技術の誕生や市場の成立等が歴史上意義のある画期とされている。

本論では、木材利用史部門について、まず出土木材における非加工木と加工木の分析、そして用材変化と技術の分析を簡単に整理する。そして、目標として、①同居集団と木材利用の図式での関係、②地域集団による木材利用の関係、③政治的組織下での集団と木材利用の関係、④商業的流通下での集団と木材利用の関係といった問題解決の見通しを抽出する。研究対象は発掘調査による出土資料である。

#### 2. 出土木材における非加工木と加工木

発掘調査で収集できる資料について、その「原位置性」の問題が絶えず注目されてきた。それは、土器

\*〒 305 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学歴史・人類学系

Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba, Tennoudai, 1-1-1, Tsukuba 305, Japan.

の同時期性を確保するための考古学的議論であったり、検出花粉の現地性・異地性検討といった植物学的議論であったりする。木材利用史の視点からも、出土材中の非加工木に対して「原位置性」の問題を追求する必要がある。また、非加工木埋没の成因には、流木としての別地点からの流入・周辺に生育していた木の埋没・人間が利用した木の廃材などが想定される。それらの特定は困難な点が多いが、この非加工木を検討することによって、木材利用史をより立体的に理解することが可能となる。

本論で検討する時間軸中の遺跡においても、木材検出状況の変化が認められる。遺跡での非加工木と加工木の混在状態は、時間軸を遡るほど入り組んだ様相を示し、時間軸を新しくするほど分離された様相を示す。これを人為的活動に注目すれば、樹木の生育地点・加工地点・消費地点が地理的に近い関係にあった状況から、それらが分離して行く姿として理解することが可能である。具体的な調査例として、縄紋時代の集落における自家消費的な木材活用システムと、江戸時代の木材伐出業者や材木商を介在しての木材活用システムを、その対極相に例示することができる。

縄紋時代の木材利用は人間・植物関係が直接向き合った姿で理解され、樹木の生育地点・人間の加工地点や消費地点をひとつのものと理解できるものである。そこでは、消費者自らが加工者・伐採者であり、したがって対象樹木の多くは生活域周辺の植生に求められる。消費者ニーズが直線的に周辺植生に向けられる関係である。経済活動の中心的なセトルメントを調査した場合、そのシステムの大枠を復元可能なデータが保存されている場合があるし、活動の一拠点であるセトルメントの調査であっても人間・植物関係を直接向き合わせて理解しやすい。

一方、江戸時代の木材利用は樹木の生育地点・加工地点・消費地点が分断され、対処する人間も別になる。規格品製材というニュートラルな中間材を持つことによって、生産者と消費者、生産地と消費地は分離され、木材利用のイメージは分断して機能している。複雑な都市機能や商業取引に起因して、調査空間が木材活用システム全体を単純に復元する情報を保有している可能性は低くなる。江戸時代の木材伐出量は膨大で、熊沢蕃山をして「天下の山林十に八・九は滅す」と嘆かせたことは有名であるが、これは、木材利用イメージ分断により人間・植物関係のバランスを確認しにくくした江戸時代の事例と位置付けることができる。この事実は、裏返せば江戸時代の調査例では、その分断された断片部分を発掘することが通例で、調査者の資料解釈において木材活用システム全体を描くことの難しさという点も内包している。

### 3. 木材利用史概観

発掘調査に伴う木材利用部門の研究は、長い間、機能の復元考察・製作技術の考察・用材の考察が進められてきた。木製農耕具には堅牢なカシ類が使われるとか(末永ほか, 1943)、丸木舟の用材地域差(清水, 1968, 1975)といった研究である。しかし、非加工木を含めた遺跡出土材の分析は、考古学研究者の発掘時資料採集における問題意識の変化と植物学研究者の樹種同定量の増加が可能となった1980年代以降に始まる。そうした調査が、木材利用史の研究に重要なデータを提出し始めている。そこで、各報告書のデータを再整理して、木材利用史の概観を示してみたい。

#### a 「同居集団内での木材利用法の運用」から「地域集団間での木材利用法の運用」へ

表1は埼玉県寿能遺跡(埼玉県教育委員会, 1982, 1984)のデータである。寿能遺跡では、紀元前10,000年紀から10世紀の資料を調査することができた。日本列島の歴史区分でいえば、縄紋時代草創期から平安時代までに相当する。ここで明らかになったことのひとつは、紀元前2,000年紀(縄紋時代中～後期)の木材利用である。この時期に非加工木同定結果ではそれぞれ30%ほどの量を占めるクリ・ハンノキ類の加工木同定結果には極端な違いがあらわれる。クリは土木用材として低湿地杭列や木道に利用されているが、ハンノキ類は入手が容易であったにもかかわらず利用されていない。同様に利用頻度の低い木には、ヤナギ類・ナラ類がある。また、非加工木には未確認や少ない量の存在だが、加工木に多いものには、イヌガヤ・カヤ・トチノキ・サクラ類がある。これらは特に容器(漆器)の用材として顕著であった。

寿能遺跡例に代表させて縄紋時代の木材利用を説明するならば、①有用材の識別が進んでいたこと、②居住域周辺の植生に対応した木材利用であること、③必要な材によっては居住域を離れた地点からの持ち込みがあること、といった状況が予測される。基本的には紀元前4,000年紀の縄紋時代前期における木材利用(福井県教育委員会, 1979)の延長上に考えることのできる木材活用システムである。これらは、「同

表1 埼玉県大宮市・寿能遺跡の出土木材 (縄紋時代中期～平安時代)。資料報告者：山田昌久・飯島克己，樹種同定者：鈴木三男・能城修一・植田弥生 (埼玉県教育委員会，1982，1984)

樹種 類(科) 加工木	縄 紋 時 代						占墳時代		平安時代	
	早期以前	前期	中期	(確-疑)	後期	晩期				
カヤ類 イヌギヤ マツ類 モミ類 スギ類 ヒノキ類 トウヒ類 ヤナギ類 オウゴン類 クマシデ類	3)	1) 1 2) 1 2)	3) 1 5) 2	1 3	6) 5 18) 3 2) 8 1) 1	4) 1 1)	1) 1 3) 3 1)	4) 1 1)	1) 1 3) 3 4) 4 1) 3	3
ハンノキ類 アサダ クスノキ ナラ類 カシ類 クリ ニレ類 ケヤキ エノキ ムクノキ	4	7)	102)	1	138)	4) 4	31) 2 1) 1	7) 1		
ヤマガワ コブシ コクラ類 サナカノキ ナカノキ ネムノキ イヌエンジュ キハダ ニガキ アカメガシ ヤマウルシ	1	2) 4)	17) 1) 3 5) 1 7) 2 2)	1 1 3 1 2 2	21) 3 7) 2 2) 4 2) 4 2) 7 1) 2 1) 1 2) 1	9) 1 6) 5 1) 3 1) 1 1) 1	17) 2 2) 2 2) 2			
ヌルデ類 カエデ類 ムクロジ類 ブドウ類 マタタビ類 トチノキ ニシキギ ツゲ ヒサカキ タラノキ		1) 1)	9) 3) 3)	2	5) 1 2) 3 8) 3 1) 1 1) 1	6) 6	2) 2 1) 1			
ウコギ類 ハリギリ類 ミズゴノキ類 エトネリコ類	6	1) 1)	2) 2) 2) 2) 6)	1 3	2) 3) 5) 5 13) 3	2) 2 3) 5 1) 3 1) 1	2) 2 1) 1			1

表2 北海道小樽市・忍路土場遺跡の出土木材 (縄紋時代後期)。資料報告者：三浦正人，樹種同定者：石田茂雄 (北海道埋蔵文化財センター，1989)

樹種	斧柄	弓	小型弓	弓材	横つち	容器	容器類	発火棒	クサビ	タモ棒	ヤス?	篋	加工材	建築材	角棒	証目板	板目板	分割材	
セシヤ ナライ ハイイ トス スハ トク カバ	2 1 1			1	2	1	3	4	2	2	1		2 10 8 2	4 12 14	1	1	3	4	1
ハンノ クミ シ エゾ													2 1 1			1	1		
散孔材 散孔材 環孔材 針葉樹	2 3 3 1				1 1 1			2						4					



つながるものとして残る。

その問題に関わる資料として、北海道忍路土場遺跡 (北海道埋蔵文化財センター, 1989) のデータが注目される。豊富な加工木・非加工木の総てに樹種同定が行なわれた訳ではないが、表2のように木製容器の用材は大きくふたつに分かれた。ひとつはセン・ヤチダモを使ったグループ1で、他の製品や建築材にも共通して用いられる木である。もうひとつは他の製品には全く使われないトチを用材としたグループ2である。グループ1の木製容器は、白木のままで北海道から東北北部の地域に特徴的な個性的形態をとる。グループ2の木製容器は、漆器でありより広い地域に共通する形態をみせる。用材や漆技術の面と、グループ2の存在からは、「地域集団間での木材利用法の運用」を予測することも可能である。忍路土場遺跡では漆技術運用に関する遺物も出土しており、グループ2の木製容器が「同居集団内での木材利用法の運用」の結果であることも全く否定する訳にはいかない。しかし、ひとつの集団の居住領域から離れた地点からの有用材獲得には、地域集団間で共有された用材知識と木材利用法が用意されると判断することは不自然な流れではない。調査結果を素直に解釈するならば、紀元前2,000年紀=縄紋時代の後半には「同居集団内での木材利用法の運用」を基本としつつ、「地域集団間での木材利用法の運用」が一部始まっていたとする事ができるのである。

#### b 「地域集団間での木材利用法の運用」と「政治的組織下での集団と木材利用の関係」の成立

表3は福岡県拾六町ツイジ遺跡 (福岡市教育委員会, 1983) のデータである。この各時代にわたる木製農耕具の用材がカシに集中する傾向は、関東以西の日本列島にほぼ普遍化できる。紀元前500年から紀元後400年にかけて日本列島に稲作技術が伝えられ王権が生じるまでの動向は、一般には弥生時代から古墳時代前期と時代区分されている。と同時に、木材利用の分野においても人間・植物関係上重要な変化が起きている。それは、板材の製作による木工技術中の伐採者と製作者の分断開始である。

表4は群馬県新保遺跡 (群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1986, 1988) のデータである。新保遺跡におけるアカガシ亜属材は、非加工木には殆ど見受けられないのに対し、木製農耕具の用材あるいは板材として多く確認できた。それはもうひとつ農具に充てられたクヌギ節材が、非加工木を多く残していたことと対照的な検出状況であった。中部高地・関東北部・東北部の地域では常緑のカシが生息しておらず、クヌギ等の近似材で農耕具を作成していたが、新保遺跡例はアカガシ亜属材が農耕具の用材として板に製材さ

表4 群馬県高崎市・新保遺跡の出土木材 (弥生時代後期を中心とする)。資料報告者：山田昌久、樹種同定者：鈴木三男・能城修一 (群馬県埋蔵文化財調査事業団, 1986, 1988)

樹種	縄紋中期			弥生中期～古墳前期		
	非加工木	非加工木	加工木	非加工木	非加工木	加工木
カヤ		0.2%	1.7%	ニガキ		0.3%
イヌガヤ	0.4%	0.4	5.0	ヌルデ	1.7%	
モミ属	0.4	1.3	7.5	ヤマウルシ		0.3
マツ属単維管束亜属	0.4			カエデ属	1.3	0.4
スギ			0.6	ムクロジ		1.0
オニグルミ	1.7	8.3	0.9	ツルウメモドキ		1.0
サウグルミ		0.3		ケンボナシ属		0.4
ハコヤナギ属	0.4	0.1	0.3	クロウメモドキ		0.7
ヤナギ属	2.6	2.1	0.6	クマヤナギ属	0.4	
カバノキ属		0.3	0.2	ツタ	2.6	
クリ	16.4	13.0	9.7	グミ属	1.3	0.3
ブナ属	0.4			クマノミズキ類	6.5	0.1
コナラ属クヌギ節	6.9	33.9	43.6	ミズキ	0.9	
コナラ属	9.1	7.8	2.9	ウコギ属	1.3	1.0
アカガシ亜属		1.0	15.1	エゴノキ属	9.1	0.3
ムクノキ	0.9	0.9	0.2	トネリコ属	1.7	
エノキ属	18.5	9.4	2.3	イボタノキ属	0.4	0.3
ニレ属	3.4	1.1	0.5	クザギ	0.4	
ケヤキ		0.8	1.4	ムラサキシキブ属		0.1
コウゾ属	0.4	0.5	0.1	キリ		0.2
ヤマグワ	5.2	6.6	0.7	ニワトコ		0.4
ヤブツバキ	0.4		0.3	ガマズミ属A		0.5
サカキ		0.4	0.2	ガマズミ属B		1.0
モモ	1.7	0.2	0.2			
サクラ属		0.3	0.1			
フジ	0.4	0.4				
コクサギ	1.7	0.5				
キハダ		0.1	0.3			
サンショウ		0.2				

れて持ち込まれていた可能性があり、クヌギ節材は集落周辺から調達し集落内で加工していたと想定される。

以前この動向を説明して、縄紋時代は丸木活用・弥生時代は板材活用であったと木材利用法を区別し、「伐採者—製作者—使用者が同一人（集団）で、木材活用のイメージラインを共有する縄紋時代の木工技術」と「伐採者—製作者—使用者が必ずしも同一人（集団）でなく、木材活用のイメージラインが描かれていなくても部分ごとに運用可能な弥生時代以降の木工技術」とにその本質が異なるものと位置付けた（山田，1987）。これを木材利用部門の人間・植物関係で解釈すると、紀元前 2,000 年紀＝縄紋時代の後半に萌芽が予測された、「地域集団間での木材利用法の運用」が、この時間軸内ではより確実に成立した証拠といえる。「伐採者—製作者—使用者が必ずしも同一人（集団）でなく、木材活用のイメージラインが描かれていなくても部分ごとに運用可能な木工技術」は、集落単位の消費形から地縁的な集団間での消費形へ、さらに地縁の関係を越えた集団間での消費形を準備するものであった。その結果として、古墳時代以降の「政治的組織下での集団と木材利用の関係」は、製材技術の成立を生かした方法によって成り立ったものと予測されることになる。

#### c 「政治的組織下での集団と木材利用の関係」と「地域集団間での木材利用法の運用」の交錯

5 世紀以降、木材利用史における人間・植物関係に新たな仕組みができる。それは、燃料としての木材消費の飛躍的増加である。表 5 は福島県武井地区遺跡群（福島県教育委員会，1989）の製鉄炉・木炭窯等で検出した炭化材の樹種同定結果である。ここではシデ・コナラといった、それ以前の寿能遺跡や新保遺跡では加工用としては使用頻度の低かった木が、燃料用の材として確認されている。

古墳時代の後半期には生活様式の大陸化として、住居内竈での調理が普及し、個人分配用食器による食生活が始まる。一方で鉄製用具の生産が急速に広まり、6 世紀以降には東北日本にも及ぶ日本列島のほぼ全域での鉄生産も開始された。これらの燃料用材の需要は、従来資源として価値が低かった木に、新しい価値を与えた。表 1.4 で示された木材利用関係は、用具や耐久構造材としての優位性に注目した結果が反映しているが、表 5 の木材利用関係は、燃料材としての材質や入手面での優位性が表現されて、従来の利用材とは異なった樹種にも価値を見いだした状況が想定できる。

木材利用分野での新しい人間・植物関係は、日常生活における需要増加と政治的・社会的要因による需要増加により、有用樹種の拡大という展開を見せる。それは、集団領域ごとの人間干渉帯に生育していた非利用樹種の活用と同時に、新たな干渉域を拡大させることになる。この人間・植物関係は、さらに、畑作等の耕地拡大が進む時期でもある古墳時代後期から奈良時代に、関東・東北地方では、ナラ林開発が耕地開墾と燃料資源採集との運動により実施された可能性も考えられる。その開発は、地域集団の意図するしないに関わらず、鉱物資源の開発と生活様式画一化による列島規模での生産力拡大の政治的意図が木材活用の分野にも及んだものであった。

#### d 「地域勢力の再編成時の集団と木材利用」

中央の政治史で歴史を見るならば、9～15 世紀は平安時代・鎌倉時代・室町時代と貴族や武家による政権交替の時期である。しかし木材利用の人間・植物関係からは、針葉樹材開発期と考えることができ、背景に地域集団の成長・展開を見ることが出来る。東北地方南半以南では、住居形態も竪穴から脱却し、柱材・板材で空間構成する木材利用が普及した。地域勢力は中央権力地域支配の強弱変化を見ながら、耕地開発

表 5 福島県新地町・向田 A～D 遺跡・洞山 C～H 遺跡・武井 A～E 遺跡の出土木材（7 世紀後半～奈良～平安時代）、武井地区製鉄遺跡群の製鉄炉・木炭窯・土竈・住居址検出の炭化材。資料報告者：寺島文隆・安田稔・長島雄一・飯村均・吉田秀享・新堀昭裕・中村政良・石本弘・平間亮輔・安中浩・本間宏、樹種同定者：嶋倉巳三郎（福島県教育委員会，1989）

炭化物樹種遺構	マツ	モミ	スギ	クルミ	シデ	ハンノキ	ブナ	コナラ	クヌギ	クリ	ケヤキ	サクラ
木炭窯		3		2	299			1086	991	463		36
製鉄炉	2		9		14			128	49	10	3	1
住居址					1		2	26	18			
土竈								28	8	86		
不明遺構								3		10		



と集団組織化を再開し、地域ごとでの競争がはじまる。

表1の寿能遺跡例では、9～12世紀の平安時代例の木材利用についても興味深い結果が出ている。①非加工木の種類が限定される、②非加工木に認められない樹種の加工木が増加する、③容器の用材がケヤキに変化する、という状況から判断できることは、平安時代における木製品の流通・容器加工法の変化（石の道具による加工の刳物から、金属の道具による加工の挽物）と連動した用材変化である。

この用材変化は建築材にも及ぶ。表3の拾六町ツイジ遺跡の奈良・平安時代データにも明らかのように板材が増加し、そのなかにスギの占める比率が高くなる。データ中の針葉樹材増加のもうひとつの要因に、曲物容器の普及がある。表6は福島県御山千軒遺跡（福島県教育委員会、1983）のデータであるが、非加工木に無く加工木に見られる材が、調度品の製品としての搬入を示している。そこには挽物としてケヤキ挽が、曲物として針葉樹材が、はっきりと区別されての利用があった。

こうした針葉樹利用量の増加は鎌倉時代例にも明らかである。表7は石川県西川島遺跡群（穴水町教育委員会、1987）のデータであるが、ここでもスギ材の多用が示されている。建築材・曲物・桶・箆などへの針葉樹材利用拡大は、量的に膨大であることが明白であるが、農耕具などの用材は従来のもを踏襲しており、その量は減少したわけではない。そこでこの動向を、燃料材として新しい木の利用が始まったのと同様に、建築材・調度材にまた新しい木材利用方が生まれたものと考えておきたい。

また、この時間軸内に鋸や鉋などの木工用具開発が進んだことも、新しい木材利用法の誕生と密接な関係を持つものであろう。

#### e 「商業取引開始後の人間・木材関係」

16世紀以降は商人層の台頭による経済活動変化の時代である。近世都市の建設や火災復興にともなう木材消費が、日本列島の木材資源を枯渇させたと言われ、幕府や各藩による植林・農民層による植林も開始される。木材の流通網が商人層によって整えられ、また在地富農層に木材伐出の請負を委託するといった状況は、木材供給が地域社会を越えて動きだした事を裏付けている。紀元前後の製材作業出現の延長上に、この木材商業取引も成立する訳であるが、木材加工のイメージラインを分断させた木材利用の関係は、生産地のイメージと消費地のイメージに齟齬を生じさせ始める。丹波・和歌山・木曾といった木材生産地の針葉樹材資源の枯渇は、各藩規模でも同様な状況であり、山林資源再生産が行なわれる。

都市生活者は製品と製材された木材から、木材利用のイメージを描くことになる。そこで、江戸の遺跡出土資料では、木質遺物は明らかに商品化後の木材利用を物語る。表8は東京都葛西城址遺跡（葛西城址調査会、1974、1975）のデータであるが、江戸開府前後のこの資料からは、商品としての履物・漆器・曲

表8 東京都・葛西城址遺跡の出土木材（16～17世紀）。資料報告者：小泉弘・宍戸武昭・小林敬、樹種同定者：山内文（葛西城址調査会、1974、1975）

樹種	履物	漆器	曲物折敷	製品	建材	合計
モミ			2	3	2	7
ヒノキ			10	5		15
ハリギリ			2			2
サウラ	3		3	3	4	13
スギ			1	6	2	9
クリ	1	6				7
スダジイ		3				3
ケヤキ	2	9				11
ハンノキ属		5				5
ホオノキ	1	1				2
シオジ	1	1				2
カバノキ属		1				1
ブナ		2				2
サウフタギ		1		2		3
ヤマナラシ		1				1
ミズキ	1					1
アカメガシワ	1			1		2
サイカチ	1					1
クスギ	1					1
クスラ				1		1
コナトコ				3		3
ニワトコ				1		1
スルデ				1		1
タラノキ				1		1
シキミ				2		2



表9 東京都・白鷗高等学校内遺跡の出土木材 (17~18世紀)。樹種同定者：鈴木三男・能城修一 (東京都立学校遺跡調査会, 1990)

樹種	履物	製品	漆器(碗・蓋)	炭化材	合計
スギ	1	2		1	1
ヒノキ	2	3			2
モミ	2				2
トネリコ	4		1		3
アカマツ	2			2	6
クロマツ	1				2
クリ	2				1
ブナ					2
トチ			2		8
ハシ			3		2
カツラ			2		2
アサガ			1		1
ケヤ			1	1	2
フジ			1		1
カエデ				1	1
クマ				1	1
エゴ				3	3
コナ				8	8
イヌ				2	2
クロ				1	1
アオ				1	1
サク				1	1
ハン				2	2
カシ				2	2
ノリ				2	2

物の用材が、限定されながらもまだ選択幅が広がったと解釈可能な状況が読み取れる。一方、表9の東京都白鷗高等学校遺跡 (東京都立学校遺跡調査会, 1990) 例は、江戸の都市機能が整った時期のデータであり、特に漆器用材のブナ属、トチノキへの画一化は顕著である。

建築材の調査例がまだ少ない今日では、江戸時代の十分な用材結果を示すことができないが、表8,9からはスギ・サワラ・ヒノキ・モミといった材使用の事実を示すことができるし、表9からは燃料炭使用樹種の手がかりが得られる。

そして、この時期に始まった林業は、江戸時代において建築材や調度材として、木材利用の重点的存在であったスギ・サワラ・ヒノキ等の再生産を目指したものであった。20世紀に建築材の質的転換を迎えた日本において、林産資源活用のサイクルは崩れている。人間による木材利用史は一区切りついた時期を迎えているが、次の動向期での人間・植物関係は明らかでない。

#### 4. ま と め

以上の調査資料からの解釈を要約すると、日本列島 (北海道はのぞく) において人間の木材利用史はつぎのように展開していた。①人間による適材識別の蓄積、②地域集団での資源共有、③生活用具・建築材とは別に燃料材を開発、④生活用具・建築材に針葉樹材を開発、⑤商業経済の発達による消費増加と植林の開始。

それらは①集団の帰属意識 (民族) 生成の動向、②王権や国家の発生・模倣・非模倣の動向、③生産手段の改良の動向、④経済活動組織化の動向という日本列島での人類史と連動したものである。しかし発掘調査のデータは、この間の人間・植物交渉の材利用分野について、まだまだ不十分な蓄積しか持ち得ていない。今回の概観を肉付けし、広範囲での具体的な関係を導きだすことが今後の課題となる。

#### 引用文献

- 穴水町教育委員会. 1987. 西川島一能登における中世村落の発掘調査. 720pp.  
 福井県教育委員会. 1979. 鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1. 216pp.  
 福岡市教育委員会. 1983. 拾六町ツイジ遺跡. 福岡市埋蔵文化財調査報告書, 第92集. 117pp.  
 福島県教育委員会. 1983. 東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書IV—御山千軒遺跡—. 320pp.  
 ————. 1989. 相馬開発関連遺跡調査報告I. 福島県文化財調査報告書, 第215集. 617pp.  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団. 1986. 新保遺跡I—弥生時代・古墳時代大溝編—. 255pp.

- . 1988. 新保遺跡II—弥生時代・古墳時代集落編—. 521pp.  
 北海道埋蔵文化財センター. 1989. 小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡. 319pp.  
 葛西城址調査会. 1974. 青戸・葛西城址調査報告II. 173pp.  
 ———. 1975. 青戸・葛西城址調査報告III. 271pp.  
 埼玉県教育委員会. 1982. 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—自然遺物編—. 319pp.  
 ———. 1984. 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—. 858pp.  
 清水潤三. 1968. 古代の舟. 「ものと人間の文化史・舟」.(須藤利一編), 法政大学出版局, 東京. 31-55.  
 ———. 1975. 日本古代の舟. 「日本古代文化の探究・舟」.(大林太良編), 社会思想社, 東京. 11-83.  
 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎. 1943. 大和唐古弥生式遺跡の研究. 京都帝国大学文学部考古学研究报告, 第16冊. 252pp.  
 東京都立学校遺跡調査会. 1990. 白鷺. 282pp.  
 山田昌久. 1987. 縄紋・弥生時代の木製品. 「シンポジウム弥生人の四季」, (榎原考古学研究所附属博物館編). 六興出版, 東京. 118-135.

(1991年7月30日受付)

書評：奈良国立文化財研究所編. 1990. 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学成立—. 同朋舎. 195 pp.

本書は、1985年から1989年まで文部省科学研究費特別推進研究の助成金を得て行われた「古年輪変動データの分析による考古歴史研究法の確立」の成果をまとめたものである。年輪年代法の原理と具体的な作業手順、その基本的資料が日本で現在どれだけ蓄積されているか、更にそれぞれがどのように応用されているかが、豊富な具体例をあげてこの1冊にまとめられており、古年輪学の現状がよくわかる。

本書は次の7章からなる。I. 古年輪学の概略とこれまでの研究, II. 古年輪学研究的試料と方法, III. 現生木による年輪年代法の基礎的検討, IV. 暦年標準パターンの作成, V. 暦年標準パターンを応用した研究, VI. 年輪気象法に関する研究, VII. 古年輪学研究的発展。IとVIIは田中琢, II~IVは光谷拓実, Vは田中と光谷, VIは佐藤忠信と八嶋厚が執筆している。Iでは古年輪学を概説し、年輪の生物学的な側面を研究するのではなく過去に形成された古年輪を研究の素材とする理由から年輪学とはいわず古年輪学と呼ぶとする。またIには研究史が含まれる。IIでは用語の説明と、データの取り方を具体的に述べている。IIIは現生木の標本について、同一円盤標本における異なった方向、同一樹幹の異なった樹高位置、同一地域の異なった個体、採取地を異にした試料、および異なった種間について年輪パターンはどのようであるかという、古年輪学を支える基礎的研究が述べられている。ヒノキで最もよく調べられているが、コウヤマキ・サワラ・アスナロ・ヒノキアスナロ・クロベ・ツガ・スギ・ミズナラ・ブナでも検討され、成果が上がっていることがわかる。IVでは実年代の入った暦年標準パターンの作成手順が実例を上げて示されている。Vでは遺物の年輪幅パターンを暦年標準パターンと照合した結果、暦年が判明し年代不明の木製品に絶対年代が与えられた例や、使用されている木材の年代が美術品の言い伝えの年代より新しいことがわかった例や、年輪パターンから木材の産地が判明した例など多数の事例が紹介されている。最後に埋没樹木の年輪年代を測定した4例が示されている。VIでは年輪幅の変動を過去の気象データや古書の資料と対比し、降雨日数を推定する方法論が主に述べられている。VIIでは遊離している年輪パターンをつなぐ試料の発見の必要性和、それを調べることにより暦年標準パターンが旧石器時代まで伸ばせる可能性のあることを示唆して締め括っている。

本書を一読された方は、今までの古年輪学は、考古学、歴史学、建築史学、美術史、災害史などの研究分野との間で多くの成果をあげてきたことがわかり、更に、年輪年代測定法は森林の成り立ちや消長の期間を解明するのに有効であり、また当時の古気候・古環境を解明するのにいかに有効であるか、また、植生史においてもっと応用されるべき分野であることが理解されるであろう。 (植田弥生)